

| | |
|-----|---|
| 学校名 | 庄原市立東城小学校 |
| 校長名 | 朽木 孝一 |
| 所在地 | 広島県庄原市東城町川東 1342 番地 |
| H P | http://www.city.shobara.hirosima.jp/Kyouikugaku/tojo-syo/HP/index.asp |
| 学級数 | 13学級 |
| タイプ | タイプ |

1 研究の概要

(1) 研究主題

論理的思考力とコミュニケーション能力の育成
～ 「言語技術」を活かして ～

(2) 研究のねらい

「ことばのスキルタイム」の時間を特設し、「言語技術」の指導内容・指導方法の研究を継続する。算数科・総合的な学習の時間を中心に、教科等のねらいを達成するための「言語技術」の効果的な活用方法を実践研究する。また、中学校と連携し、義務教育9年間を見通した『言語技術カリキュラム』を作成する。

(3) 研究組織・体制



2 2年間の取組みの概要

(1) 平成17年度の取組み

「ことばのスキルタイム」を特設して、「言語技術」の指導内容・指導方法の研究とカリキュラム開発



実施時間 各学級週1時間

指導内容

- ・受け答えをする技術
- ・要点をまとめる技術
- ・情報を正しく伝える技術
- ・情報を的確に分析する技術
- ・様々な角度から物事をみる
- ・構成を考える技術

パイロット教員と担任のTT指導

研究公開 (小中合同)

- ・全学級「ことばのスキルタイム」授業公開

(2) 平成18年度の取組み

「言語技術」の指導内容・指導方法の研究と系統的なカリキュラム開発

教科等での「言語技術」の効果的な活かし方を研究
(算数科・総合的な学習の時間を中心に)

研究公開 (小中合同)

- ・全学級 「ことばのスキルタイム」「算数科」

「総合的な学習の時間」授業公開

「ことばのスキルタイム」の取組み

学級週1時間の「言語技術」の指導

パイロット教員と担任とのTT指導

担任の指導

小中連携 系統的なカリキュラム調整



「算数科」の取組み
授業展開のどこで
「言語技術」を活用するか
問題対面屋の場面で
・再話
・絵の分析
・テキストの分析
自力解決の場面で
・情報を的確に分析

繰り返しの場合で

- ・受け答えをする技術
- ・情報を正しく伝える技術

「総合的な学習の時間」の取組み

単元展開のどこで「言語技術」を活用するか

課題追究と情報を活用する場面で

- ・受け答えをする技術 (インタビュー)
- ・要点をまとめる技術 (再話・メモを取る力)
- ・情報を的確に分析する技術 (絵の分析・テキストの分析)
- ・様々な角度から物事を見る技術 (視点をかえる)
- 学びを表現する場面で
- ・構成を考える技術 (段落構成)
- ・情報を正しく伝える技術 (描写・説明・報告)

(3) 検証の指標及び達成目標

<検証の視点>

視点 「言語技術」の指導内容の定着

視点 コミュニケーション能力に対する意識の向上

視点 学力 (読解力) の向上・教科等での効果的な活用

視点 教職員の指導技術向上

| 評価する内容 | 期待する効果 |
|--------------------------------------|---|
| 言語技術の指導内容の定着状況 ・読解的読書力 ・論理的思考力 | 88%の達成率で文章構成や必要な事項の記述ができています。(課題・再話) 約2割に自分の意見をまとめることができる。 (道徳等 48名・算数等 50名・国語等 108名程度) |
| コミュニケーション能力の意識的向上 (聞く・話す) | 88%の児童が相手を感じ取りながら話し方・聞き方を意識して生活している。 |
| CJPT検査 | 学期末の読解力テスト、学期初めの読解力テストの得点率を88%以上に上げる。(全教員) |
| 国語科 (読む能力) | 学期末の読解力テストの得点率を88%以上に上げる。 |
| 算数科 (算理的な考え) | 学期末の算数テストの得点率を88%以上に上げる。 |
| 教科学習への課題 算数科 | 88%の達成率で、問題文を読み解く必要の情報を適切に読み取り問題を解くことができる。 88%の児童が、問題の解き方を分かりやすく説明することができる。 |
| 総合的な学習の時間 | 88%の児童が、指導・目的意識を持って、積極的な・積極的な・積極的な・積極的な活動を行っている。 |
| 指導者の指導技術 | わかやまの民間・指導・改善等、「ことば」を大切にした授業づくりに取り組んでいる。 |

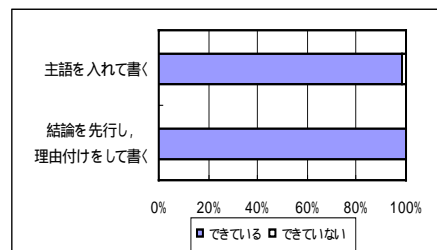
3 研究の成果と課題

(1) 成果

指導内容の定着から (問答ゲーム・紙上問答)

理由付けをして伝えたり、ナンバリングを使って発表したりする場面が増えた。

平成17年度末紙上問答ゲームの実態調査から



授業の中で理由を付けて発表することが多くなった。

日記や作文の中に、理由を入れたりナンバリングを使ったりする表現が多くなった。
児童が理由付けして発表することのよさを感じている。



ぼくは、理由をつけて発表することに賛成です。理由は、二つあって、一つ目は、説得力があるからです。二つ目は、相手にわかりやすく伝わるからです。



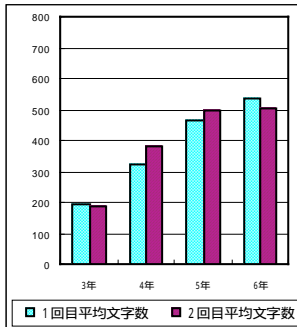
私は、理由をつけて発表することに賛成です。理由は、二つあって、一つ目は、人に自分の思いが伝わるからです。二つ目は、もし相手が自分と反対の意見の時、理由を聞くと納得できるかもしれないからです。

(6年児童 紙上問答から)

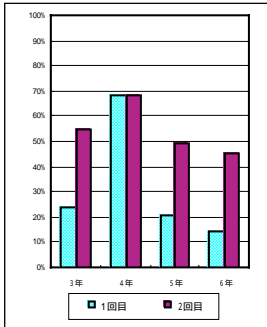
指導内容の定着から(再話)

集中して書き進める文字数が増えてきている。3・6年は、文字数が減っているが、最後まで書ききった児童の割合が増えている。聞いた話の要点をおさえ、時間内に書ききろうと意識して取り組むことができつつある。

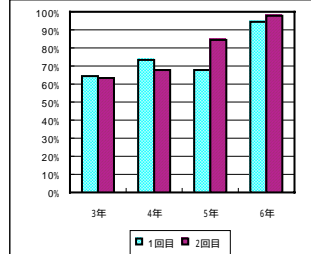
およその平均文字数



最後まで書ききった児童の割合



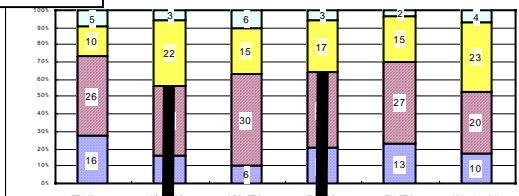
正しく段落表記できる児童の割合



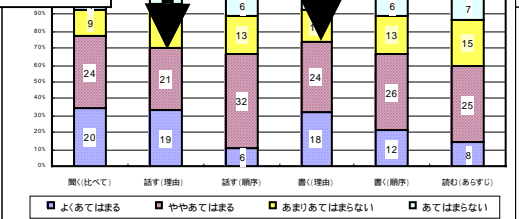
段落の書き出しを示すことで、段落表記が正しくできる児童が増えてきている。再話以外でも、段落表記の指導を継続する。

コミュニケーション能力の意識調査から

平成17年度



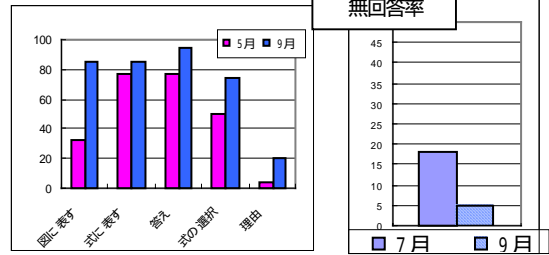
平成18年度



「理由をつけて話す」「理由をつけて書く」項目で、自己

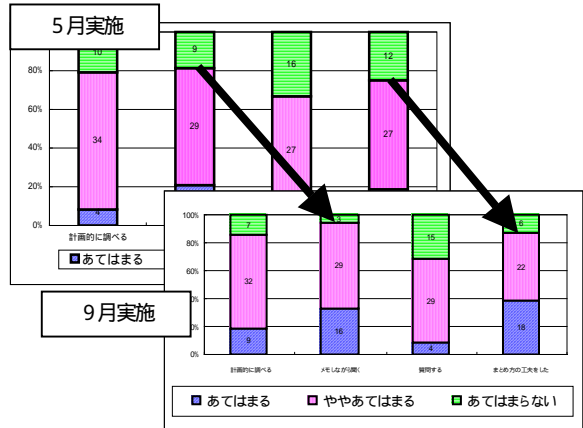
評価に伸びが見られた。

算数科実態調査結果から、



5月と9月を比較すると、どの項目も得点率がアップした。理由の項目の得点率が低いのが、考えて書こうとする意識が高まり、無回答率は5%に減少した。

総合的な学習の時間の意識調査から



「メモしながら聞く」と「まとめ方を工夫した」の項目に伸びがみられた。

教職員の意識調査から、教材研究を通して「分かりやすい発問」を吟味しようとしている。「理由や根拠を問う」ことは、児童も教職員も意識できるようになった。

(2) 課題

「言語技術」の指導に係わって

教科等の指導内容との関連から、「言語技術」の教材開発を継続する。

「言語技術」の体系的なカリキュラムを目指し、小中連携した取組みを継続する。

個に応じた指導内容を工夫し、特別支援学級で活用できる「言語技術」のカリキュラムを作成する。

学力向上と関わって

各教科等の基礎・基本の学力を高めるために、「言語技術」を授業のどの場面で、どう活用すると効果的であるか授業研究を通して明らかにする。

授業改善の視点をしばって、共通理解のもと授業研究を継続する。(発問・時間配分・板書計画等)

客観的なデータで検証できるよう、目標値の設定や評価の在り方について研究する。

指導力の向上をめざし、理論研修・授業研修の機会を計画的に実施する。

学級づくりに関わって

基本的な学習規律を徹底する。(聴き方・話し方・姿勢) 支持的風土づくり

環境づくり(発表の場の設定・校内掲示)